

任は所長のみ、小児科も在勤)を配置している。

- ・ 本院は主に内科診療、急患等に対応している。
- ・ 運動療法をやる場所がないということで、1ヶ月3,500円会費でフィットネスなどが利用できる。
- ・ 紹介率は8~9%、逆紹介率も同じくらいの比率

○医療スタッフ

- ・ 歯科医1人を配置しており、鶴岡協立リハビリテーション病院への往診も行っている。
- ・ 看護師は100%充足している。またここで年間20人を養成している。来年は7:1充足のために日本海病院へ流出するのではないかと危惧している。
- ・ 高看:准看の比率は7:3
- ・ 薬剤師5人(定員7人)、外来は本院及びクリニックとも院外処方としている。
- ・ リハビリのスタッフは30人位を配置している(PT、OT、ST含めて)
- ・ 他に、栄養士4人、検査技師15人、放射線技師6人

○平均在院日数

- ・ 一般病棟が21日位、療養病棟が30日以内

○高齢者住宅

- ・ 32室の高齢者住宅を病院の近くに、11室の同住宅を大山地区に有する。いずれも介護保険から拠出されるもので、介護認定4又は5が対象となる。
- ・ 老老介護、単身者が理由で在宅が困難な高齢者向けとなっている。
- ・ 町づくり事業共同組合「虹」が経営している。
- ・ 建設会社が土地・建物を提供し、病院側は家賃を払うシステムとなっている。
- ・ 高齢者住宅を含む地域ケアサポートを展開していく考えである。
- ・ 三川町にも同住宅を整備する予定。その理由として、会員の多い地域ということがある。

○電子カルテ

- ・ オーダリング(外来分のみ)のみ導入している。

○連携パス

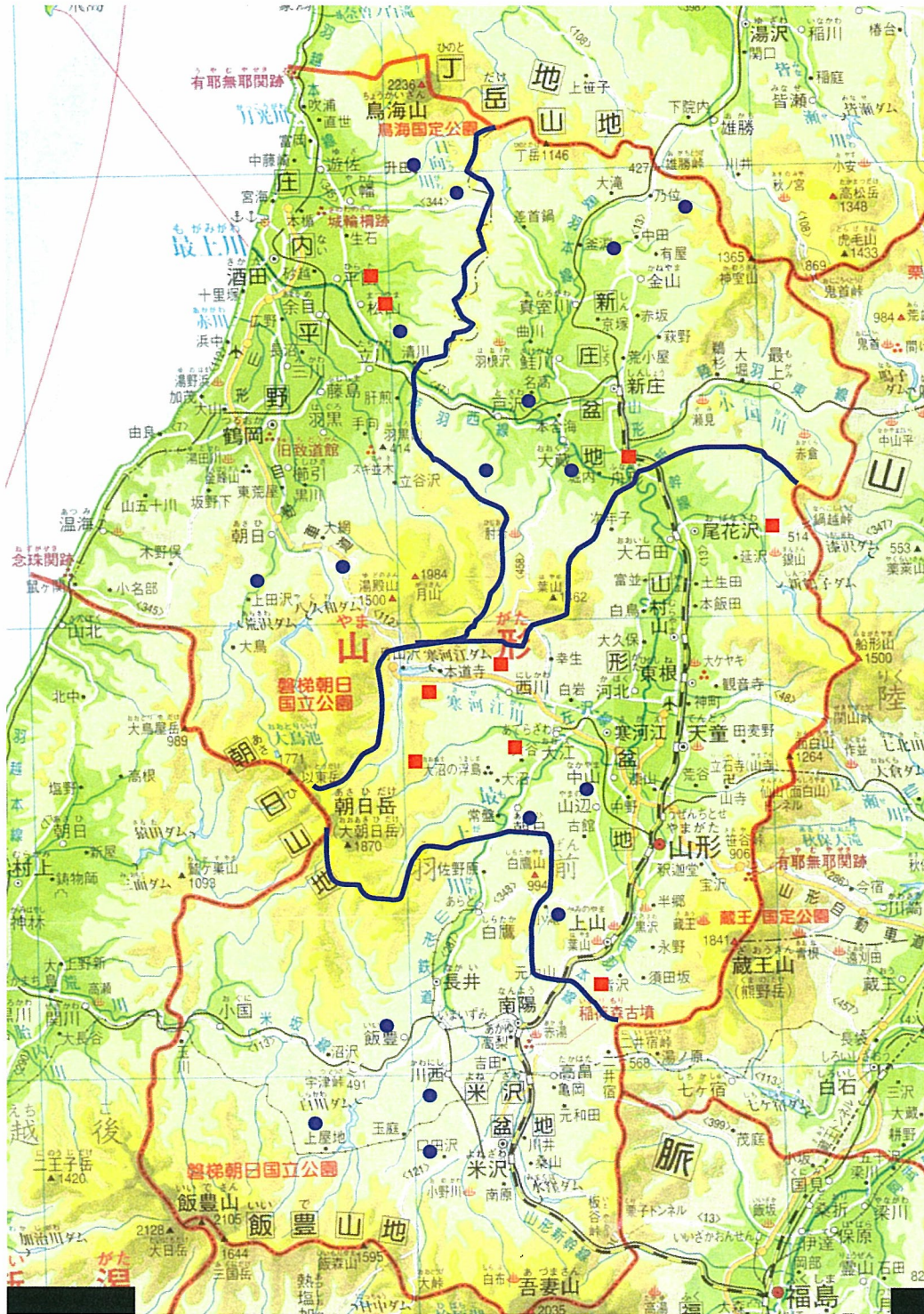
- ・ 脳卒中について、リハビリ病院中心に、鶴岡市立荘内病院を巻き込んで検討をスタートした。

○医療生協組合員のメリット

- ・ 保険外診療(健診など)については10%割引などの特典がある。
- ・ 会費は、入会時のみ2,000円で、その後は年間500円(あくまでも会費の目安)。1人平均5万円を納めているので、全体では20億円ほどの原資を有する。
- ・ ほぼ市内の半分以上の世帯が加入している。
- ・ かつて医療不足の地域だったことから、医療生協がその役割を担ってきたという経緯がある。

4 市町村立等診療所の対面調査

	No.	施設名	設置者	地区	診療日平均患者数(人)	訪問日
村山地域	1	山元診療所	上山市	狸森	12.3	平成18年12月14日
	2	中央診療所	尾花沢市	尾花沢	122.0	平成18年12月21日
	3	岩根沢診療所	西川町	岩根沢	22.0	平成19年1月24日
	4	小山診療所	西川町	入間	11.0	平成18年12月22日
	5	大井沢診療所	西川町	大井沢	内4.0、外2.6	平成18年12月20日
	6	朝日町立北部診療所	朝日町	大谷	内21.0、外4.0	平成18年12月26日
最上地域	7	舟形診療所(公設民営)	舟形町	舟形	90.0	平成18年12月18日
	8	舟形若あゆ温泉療養診療所	舟形町	長沢		
	9	真室川町立釜淵診療所	真室川町	釜淵	28.3	
	10	真室川町立及位診療所	真室川町	及位	11.9	
	11	大蔵村診療所	大蔵村	清水	内外91.1、歯20.7	
	12	中央診療所	戸沢村	古口	76.0	
置賜地域	14	国民健康保険田沢診療所	米沢市	田口沢	8.8	
	15	国民健康保険小滝診療所	南陽市	小滝	3.0	
	16	公立置賜川西診療所	川西町	上小松	100.0	
	17	飯豊町国民健康保険診療所	飯豊町	椿	32.0	
	18	中津川診療所	飯豊町	上原	30.0	
庄内地域	19	鶴岡市国民健康保険大網診療所	鶴岡市	大網	30.0	
	20	鶴岡市国民健康保険上田沢診療所	鶴岡市	上田沢	10.0	
	21	酒田市立病院飛島診療所	酒田市	飛島	8.1	
	22	酒田市立升田診療所	酒田市	升田	9.9	
	23	酒田市立青沢診療所	酒田市	北青沢	3.6	
	24	酒田市国民健康保険松山診療所	酒田市	西田	32.0	平成19年2月1日
	25	酒田市国民健康保険地味興屋診療所	酒田市	地味興屋	5.0	
	26	酒田市平田診療所	酒田市	飛島	23.7	平成19年2月1日



診療所対面調査 訪問地図(26ヶ所)

- 平成18年度訪問した診療所(9ヶ所)
- 平成19年度訪問予定の診療所

(2) 調査記録 (9 診療所)

【山元診療所】

日 時：平成 18 年 12 月 14 日 (木) 13:30~15:30 (曇り)

病 院：原田 順二 氏

対応者：山形大学 清水教授

県 健康福祉企画課 大木主査

■現状と課題 (原田医師からの聞き取り)

- ・診療は隔週で実施。昔は週2回やっていたが、人数が少なかったこと交通網が発達したことから週1に。
 - 第1・3火曜日 14時~17時 内科 香曾我部先生 (原田先生の義理の兄)
 - 第2・4木曜日 14時~17時 外科 原田先生香曾我部医院がメインであり、原田先生はお手伝い。上山市からの委託で行われている。(月8万円ですべて(医師1人、薬剤師1人、看護師1人、事務1人)込みこみでやっている。内科医の経費入っていない。ボランティアに近い。)
- ・地区の人口は7月現在475人。一番多いときは市町村合併した昭和31年で1851人いた。山元村が上山市に市町村合併した際の条件として当該診療所は開設された。
- ・地区の保健師は1名。
- ・1日当たり患者数は 内科約15名 外科約4名
- ・疾患は高血圧が多い。あとは糖尿病。内科系の患者が多い。
- ・患者動向については、前はここしかなかったが、今は自動車が運転できる人は山形市に言っている。また、逆紹介で薬をもらいにくる患者もいる。また、すぐそばに中学校があり、具合が悪くなった生徒が来るときもある。昨年度までは、診療所と併設で保育園があった(昨年度まで2名いた)が今年度廃止になり、また、小学校も山形市の本沢小学校に統合になった。(山形交通のバスで通学)
- ・老々介護の世帯多い。1人で住んでいる方もいる。農家が多い。
- ・救急車は上山から山を越えてやってくる、ほとんど山形市内の病院に搬送されている。
- ・ITの対応は必要ない。
- ・当該診療所の今後については、上山市健康課の判断次第。正直本院(みゆき会病院)に力を入れたいところだが、50年間やってきているので私の代で終わらせたくない、香曾我部先生ともども必死で続けている。冬は命がけでやってくる。でも愛着があるのでやめれない。
- ・医師の確保の秘策はあるか。
 - 当該診療所では常勤医でもないし考えたことも無い。
 - 前と同じような議論の繰り返し。病院ごとの役割をきちっと分担し病院の連携システムを作らないと。中小病院は特に。

(清水教授)

- ・置賜総合病院の救急は8割が1次救急。こうした場合、病院のすぐ脇に1次救急を行う医療機関があると良い。患者は安心だし連携もスムーズ。
- ・人件費も問題だ。県立病院の経費の7割が人件費。院長に人事権と予算権ないとダメ。組合とは白紙にしないと。
- みゆき会病院の人件費は50%程度。

■患者へのインタビュー

- ・私は76歳になるが、90歳の両親と夫、3人の看病が大変。19日から28日まで2週間ほどショートステイを利用できる予定なので助かっている。ずっと置いてもらいたいがなかなか空かない。
- ・週1回の診療の時期に具合が悪くなったら、診療所にくるけれど、それ以外は近くて7キロ離れた山形市長谷堂にある岡部医院にタクシーで行く。片道4千円弱かかる。息子達は勤めで日中いない。
- ・昔は交通の便が本当に悪かった。バスの本数も少なかった。今は1日1時間山交のバスも走っているので不便は感じない。でも、日中は若い人が通勤で車を使って老人だけが残される。年寄り同士、歩ける人はお茶のみに行き来できるが、足が悪い人は取り残される。上山市の保健師はいると思うが、上山市内に集団で呼ばれることはあるが、こっちに来て訪問するというのはいない。私が保健婦やっていた頃（昭和46年～）は1人暮らしの方の具合が悪くなったら、民生委員の方にそれとなく伝えて連携してやっていた。今は民生委員だけが地域に来ている。
- ・慢性疾患の患者が主。診療所の周辺の住民が利用している。バス停は診療所から500mほど離れた位置にある。山元地区でも診療所周辺に住んでいない人は、バスに乗って山形市の長谷堂に行く人もいる。
- ・週に1回でも不満は無いが、無くしてもらっては困る。冬はこの診療所までは来れるが、山形まで行くのは大変。

【舟形町 舟形診療所】

日 時：平成18年12月18日（月） 14：00～16：30 （曇）

診療所：博士 原田 政雄 氏

対応者：山形大学 教授 清水 博 氏

山形大学大学院生 高橋 俊章 氏（県福祉相談センター 理学療法主査）

県健康福祉企画課 企画主査 長岡篤志

1 地区状況等

(1) 診療所の位置：JR舟形駅と同一敷地、舟形町役場まで徒歩5分

(2) 舟形町の人口：約6,800人

(3) 診療体制等：診療科 内科、皮膚科

診療日時 月～金曜日 8時30分～17時30分、

土曜日 8時30分～12時30分

医師1、看護師6、臨床検査技師1

町が建物を作り、原田医師が運営（開業）する「公設民営形式」

(4) 外来患者数：1日約80人

(5) 通院手段：町営バス 等

(6) 周辺の医療機関：星川医院、県立新庄病院、朝日町立病院、新庄徳州会病院

(7) 周辺の福祉施設：特別養護老人ホーム、老人デイサービスセンター 外

(8) 救急体制、夜間・時間外の診療体制に関すること：県立新庄病院又は新庄徳州会病院にて対応

2 医師のニーズ

患者は大部分が舟形町民で、新庄・北村山からも通院する人はいる。患者数は1日80人前後。プライマリーケア全体を期待されている。

診療所は町の中心部、駅の構内にあり、町営バスも走っているため、アクセスは良い。冬期間に車で通う患者も、道路は除雪してあるので苦にならない。

舟形町内には、他に開業医が1軒ある（星川医師80歳）。

老・老介護や高齢者の単身者はものすごく多い。高齢単身者は80～90人いると聞く。

代診医については賛成。今のシステムでは研修にも行けない。2～3週間研修に行き、技術を習得できると良い。地域で診療に携わる医師の技術が向上すれば、病気が小さいうちに治療ができ、結果として診療費のコストダウンにもなる。技術を習得する機会があると分かれば、へき地に勤務する医師も増える。医師とは満足のいく医療がやりたいものだから、それができれば勤務地は関係ない。今のシステムでは、へき地に来ると24時間責任があるし、技術の習得も難しいし、医師も燃え尽きてしまう。

舟形診療所では内科と皮膚科を標榜。骨粗鬆症など整形外科的なものも診察するが、膝とか腰とかは診察できない（⇒技術習得に行きたい）。急患（夜間）は診察しない。医療事故の懸念があるため。急患は県立新庄か新庄徳州会で診察してもらう。

舟形診療所では電子カルテを採用している。紙のカルテはない。もっとも、どこかと結ん

でいるわけではない。画像診断もパソコンで行う。

収支は何とか黒字。だが現在の点数制度では、3年くらいすると赤字になるのではないかと懸念している。

診療機器はCT、レントゲン（CR）、内視鏡、エコー、心電図等。

舟形診療所は県立中央病院の協力医。

看護師はあまり出入ない。また、なんらかの事情で退職となっても、有資格者が少なく、この地区では補充は難しい。

3 住民のニーズ

【男性、56歳】

町内在住。最初は皮膚科に来た。その後はここに通っている。

町の人もたいていここに来る。悪くなると紹介状を書いてもらい、県立新庄病院などに行く。

舟形診療所は「町の診療所」という感じであり、ないと困る。困った人はたいてい舟形診療所に来る。「耳が…」という人は専門の所に行く。地元に勤務しているのだからここに来るが、新庄に勤めている人は徳洲会に行く。時間外も診てくれるところ少ない。子供の急患なんかは県立新庄病院に行っている。医療としては足りている。

父親の肝臓癌を舟形診療所で発見し、新庄で手術した。今でも月2回ここに来る。身近にあるのがいい。町営バスもあるし、自分で来られる。薬局も隣にある。冬でも交通は困らない。家族の「かかりつけ医」という感じである。

医療で困っているということは医療費が高くなっていること。介護で入所している人なんかも月8万かかると聞いている。医療費は4月から、身に沁みて上がったと感じる。自分で来ようとしめない限り、病院には行けない。

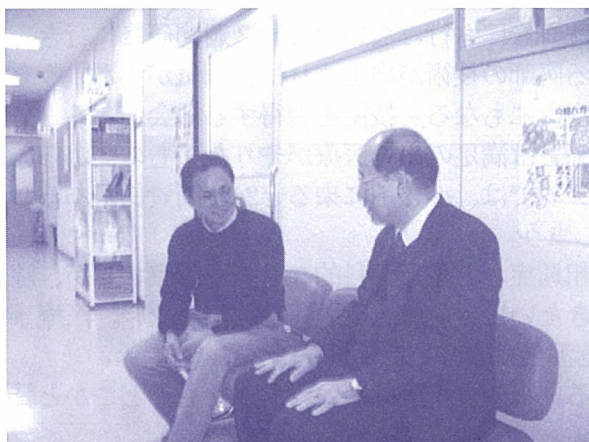
健診は職場で受けている。検診する場所は新庄にある。町でやっている人間ドックもある。これも新庄で。あとは徳洲会に行っている人もいる。

一人暮らしとかの人のところを回るのは、ケースバイケースで民生委員とか保健婦も行くが、やはり近所の人。この辺は近所の人が助け合っている。あとは地域の役員さんとか。

4 考察

舟形町のプライマリーケアを担っている公設民営形式の診療所。町の中心部に位置し、冬季の除雪もなされ、交通状況は良好。新庄市にも近く、県立新庄病院や新庄徳洲会病院への交通の便は良い。

課題としては、①高齢化から、患者のニーズとしては膝とか腰とか整形外科的なものもあるが、対応できない（専門は内科と皮膚科）こと、②地域に看護職資格者が不足しており、なんらかの事情で退職したら補充は難しい状況であること、③現行の診療報酬制度では近い将来赤字化が懸念されること、が挙げられる。



【大井沢診療所】

日 時：平成 18 年 12 月 20 日（水） 13：30～15：00（曇）

診療所：須貝昌博医師

対応者：山形大学 清水教授

山形県福祉相談センター 更生課高橋俊章

健康福祉企画課 大木主査

内科 2 回／月 12／6・20（水）

歯科 毎週木曜 13:30－15:30 隔週月曜 10:30－12:00

診療所は役場支所と同じ建物

メンバーは町立病院院長、看護師、薬剤師、運転士。

昨年までは、高松から週 1 回、医師と保健師が来ていた。上記メンバーは今年 4 月から。

薬は事前に調剤してくる。

須貝昌博先生より

多い疾患は、高血圧、腰痛、膝痛などの慢性疾患

今回薬は 40 日分処方する。普段は 4 週分。

受診者はいつも 10 人以下。薬のみの人もある。

大井沢から本院に行っている人の方が多い。

冬は交通の便が悪いので、ここに来たいという人は多い。

岩根沢、大井沢、小山とあるが、患者は減っている。

何かあった場合は、血液検査、レントゲンもとれない。急性期には本院に行かなければならない。ここではた
いしたことはできない。

Q) ここで大変なことは？

冬の交通は大変。（この辺の人はたいしたことないというが・・・）

救急が大変。救急車が大井沢まで来るのに 30 分（25 km）。病院に搬送されるまで 1 時間かかる。以前心
筋梗塞の人がいた。

Q) 保健師が誰か見て回れるか？

保健師が入っている。いろんな事業があるから。（特定高齢者の割り出し、健康教室、包括支援センター）

Q) 患者のニーズは？

患者に聞かないと分からない。この町は上手くいっている。

町立病院は 24 時間体制。年中無休。

1 次に関してはできている。（振り分けはできている。）

そういう意味では住民は安心されているのではないかと。

出張診療所、在宅、訪問診療、訪問看護に力を入れている。

Q) ここまでカバーするとすれば今の（医師）4 人ではどうか。

足りないといっても、今の定員を増やしてくれということにはならない。

財政も、来る人もいない。

自治医大も県内手一杯だ。県内全部見なければならぬから。

ここは恵まれている。

Q) 保健師は？

4人、充実しているとはいえない。

限られた人数で一生懸命やっている。

役場大井沢支所長（宮林良幸氏）

Q) 患者さんは、交通の便や雪にそんなに困らないというが・・・？

交通の便は決して良くないが慣れているのではないかと。

昭和40年には孤立して生活していた状況があった。徒歩の生活。

特に、医療関係では無医地区で苦勞した地域である。

昭和の初めは志田周子先生が大井沢診療所の医師として地域医療を支え、亡くなった後は町立診療所として昭和38年に開設された。日本医科大学から交代で医師を派遣していただくも、昭和48年になるといきづまり、昭和49年冬1・2・3月には、1ヶ月毎に医師が常勤したことがある。横山万蔵氏が町長に就任するやいなや新潟大から医師を週1回派遣することとなり、その後横山徹医師が診療してきた。

急性期では、町立病院に、半日か1日かかり。

慢性期はここで診察や投薬を受けている。

Q) この地域の人が一番困っていることは？

動けるうちは畑、きのこ狩り、この地域は生涯現役なので丈夫である。

ここには保健師はいない。町立病院の隣にいて、こちらに訪問し把握している。

二人暮らしで、一人が病院や施設に入り、一人が残されると困る。

大井沢地区の高齢化率は49%、西川町は28%である。

佐藤氏（女性、事務員）

ここに来る人は高齢者が多い。

子供は、寒河江・仁藤小児科に行く。

お産は、河北、国井産科、山形に行く。

Q) 医療・介護で困っていることは？

何かあったときに交通の便が悪い。

救急車を待たずして、こちらに設備があつて、来るまでに何かできないか。県の事業（AED集落設置促進事業）でAEDが大井沢に設置になった。ちょっと安心した。

最近では高速ができたので、大分良い。

Q) この辺の暮らし向きは？

年寄りには農業。若い人は寒河江あたりに就職。

Iターンは12世帯。

患者A（女性）

1/4W受診する。（先生は1/2W来る）

この診療所を利用するのは、60歳以上70近い人が多い。

病院は町立病院まで行かないといけない。

ちょっとしたことはここで診てもらい、薬をもらう。（高血圧とか）

この辺は交通の便は良い。道路は良いので病院まで行ける。

病気のときは町立病院まで行く。

病気で困るのは、救急車が来るまで時間がかかること。（30～40分かかる）

倒れたりしたとき、どういう処置をしたら良いか分からない。

子供で、小児科というと寒河江まで行く。

一人暮らしの人は、人を頼んで病院へ行く。

この辺の人は、仕事で寒河江まで行っている。（寒河江まで1時間くらい）

バスは一日3回（町営）走っている。

診療所があって助かる。

いつも8人くらいが診察を受けている。

患者B（女性、89歳）

一人暮らしをしている。

診療所があるから困っていることは特にない。

1回／月診察を受けている。

冬は隣の人が雪かきをしてくれる。部落内の面倒見が良い。

患者C（男性、75歳）

4人暮らし。

血圧が高い。

困ることは特にない。

かなりひどい時は、自分の家人が病院へ送ってくれる。

隣人関係が良く面倒見が良い。助け合っている。

糖尿病は町立病院へ行く。風邪引きも町立病院へ行く。

この診療所までは車の相乗りで来る。

遠い人で4kmくらいある。

夏でも歩いてくることはない。

自転車で来る人もいる。

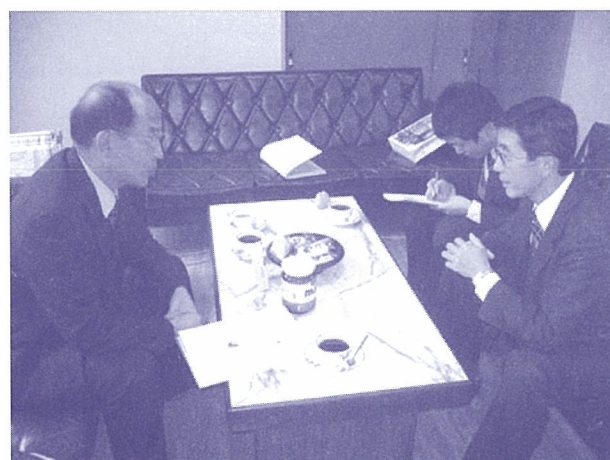
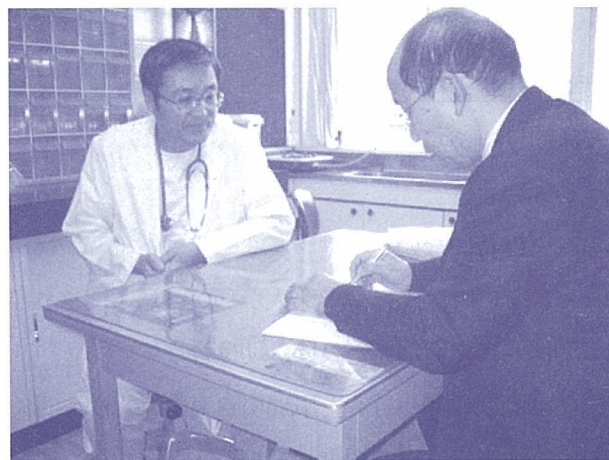
膝が悪いときは、寒河江や谷地に行く。

町立病院へ行くまで雪で困るといのはそんなにない。

雪は3m積もったが除雪がしっかりしている。

家族が病気になって困るのは、日曜や夜間。

夕方病院に電話して待ってもらうときがある。



【尾花沢市中央診療所】

日 時：平成 18 年 12 月 21 日（木） 14：00～15：30（曇）

診療所：加藤圭介

対応者：山形大学 清水教授

健康福祉企画課 大木主査

- ・ 医師は常勤 2 人、外科は加藤圭介医師、内科は奥山医師。薬剤師 1 人、レントゲン技師 1 人、看護師助手 1 人、事務 5 人、看護師 12 人。
- ・ 1 日外来患者 120 人。60 歳～70 歳の高齢者が多い。トリアージし、北村山公立病院などに紹介。
- ・ 19 床、平均在院数は 15 日。大腸カメラの入院が多い。
- ・ 患者は高血圧、糖尿病、高脂血症の方多く、バスやタクシー、家族に送ってもらってやってくる。
- ・ 週末は大学と所長が対応。第 1 土曜日曜は所長。第 2、3、4 土曜日曜は大学から派遣してもらっている。患者は 10～15 人
- ・ 疾患の特徴は、女性の方に骨粗しょう症が多いこと。骨量を判定すると 10～20 歳ふけている。啓蒙活動がまだまだ。
- ・ 訪問看護ステーションは無い、かかりつけの方が具合悪くなったら看護師が行く程度。午後でも患者が来ちゃうので患者が多くて往診はできない。
- ・ 救急は、基本的には北村山公立病院。距離は 21 km 車で 20 分、救急車で 15 分かかる。北村山が無理なら、県立中央病院、河北病院に行く場合もある。県立の大きな病院でもふさがっている場合があり、たらいまわしになることもあり残念。
- ・ 収支は今はトントン。
- ・ 医療機器 内視鏡上部 2 本、下部 2 本。洗浄器械と ERCP のカメラ
レントゲン。マンモはない。エコーは 2 台。CT、MRA は北村山に依頼
- ・ 特老長寿園の主治医や、学校医、老人ホームの嘱託医、休日の当番医、人間ドックは尾花沢でここを含め 3 件しかやってなく、1 年間のうち 4 ヶ月限定で実施しており、150～200 人

医師等からの聞き取り

Q 医師の確保について

A 本診療所は北村山公立病院と同様、日本医科大から医師の派遣を受けてきた。私も北村山公立病院からの派遣という形にはなっているが、実際はこっちに来ている形になっている。よって、北村山とは完全に連携が取れているわけでは無い。県立中央病院に紹介しても怒られない。H16 までは外科 2 人、内科 1 人が派遣できていた。臨床研修の義務化により医局に医師がいなくなり、尾花沢市は「市」でへき地でないということで、引き上げられた。奥山医師も日本医科大出身であるが、医局からの派遣でなく中津川診療所に勤めていたところを人手がなくなって来てもらったもの。

Q 医者の勤務状況

A ・ 消化器外科 カメラ年間 600～700 人、内訳は上部 600 強、下部 70 程度 朝 7 時 30 分から外来始まる 9 時までやっている。ときには外来が終了してからもすることがある。

- ・ 患者は尾花沢市、大石田町の方。尾花沢市の人口は 20,000 人、それよりも多い 28,000 人分のカルテがある。

- ・整形も少しくらいはできるよう、機会を見つけて研修を受け自分なりにがんばってきた。膝の注射もやっ
ており、整形は胃腸科よりも患者数が多い。
- ・整形の医師もほしいが、耳鼻科、眼科の医師がいたらいい。小児科もいたら助かる。乳幼児は見落としが
あるといけないので今は村山市楯岡、東根市の開業医を紹介している。
- ・整形は県中、済生、北村山。尿管結石は済生館に依頼

Q 山形大学の事業で 65 歳の退職されたスペシャリストの医師をトレーニングしてへき地で働いてもらうと
いうモデル事業を行う。ここで必要とされるのはどんな医師か。

A 特技を持っていて、マメな先生。小児科、眼科、耳鼻科、整形科の医師。内科は飽和状態。
また、当直してくれる医師も必要。

Q へき地に医師が集まらない理由として、①代診をする人がいない②責任が持続する③子女の教育の問題が
ある。これについては先生はどう対応しているか。

A 我慢は当然。覚悟している。診療所は夜は義務ではないが、会議などがあれば、北村山に運んでもらうよ
うあらかじめお願いしておく。

Q 住民からの要望はないか

A①住民は医師は何でも屋であってほしいと思っている。ここは冬、雪で埋まればどこにもいけなくなる。冬
時は県立病院や公立病院の患者がこちらで薬をもらいにやってくる。春になれば戻っていく。
②年寄りに多いが、白衣を着てればなんでも診れるんだという意識がある。

Q 尾花沢市の高齢者の状況は

A 尾花沢市の高齢化率は 29%。高齢者アパートは無い。

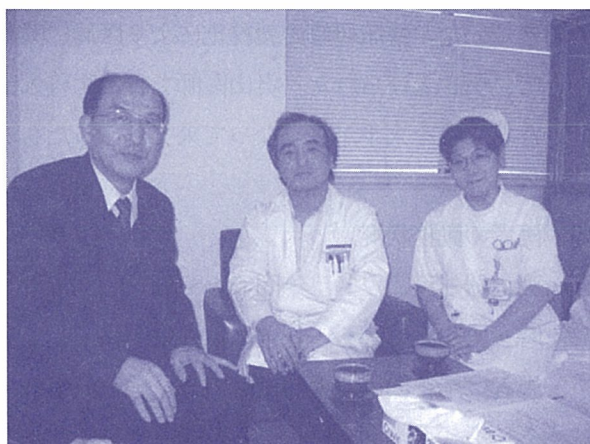
老人ホームに入るには月 10 万程度の金が要る。お金を持っていなければ入れない。65,000 円の年金では
無理。診療所に対しても未払いの方がいる。へき地には貧乏な方もおり、この人たちに何ができるか。何と
かして救ってあげたい。お金が無いから診てあげませんということとはできない。

Q 病診連携について

A 大きい病院では急性期が終わったらこちらへ送ってよこす。このところ県立病院の患者でターミナルケア
が何件か続いた。制度なので理解するし協力はする。でも大きな病院で診れるものは診てほしい。ここは
大きな病院ではないので長期入院の受け皿だけで考えてほしくない。

住民の声

1 人暮らしの女性。週に 3 回来る。冬はリュックを背負っ
て 3km 歩いてくる。タクシーで 800 円かかる。ボタンを
押したらタクシー会社につながってタクシーが来る仕組み
もある。市役所で市内に 45 台設置している。ここの診療
所の先生がどこかに行ってしまうのではと心配している。



【小山診療所】

日 時：平成18年12月22日（金） 14:00～15:00（晴れ）

医 師：武田 隆氏 対応者：山形大学 清水教授 県 健康福祉企画課 武田主事

1 地区状況等

(1) 地区状況：小山地区は、西川町立病院から車で約20分の距離に位置している。

同地区への道中は山道となっており、山道を登るにつれ、道幅は狭くなっている。冬季間は、除雪がしっかりなされ自動車の走行も可能だが、雪崩等の危険性を包含している（道路を挟み、一方は急斜面の山であり、他方は崖となっている。武田医師の話によると、去年及び5年前にそれぞれ1名亡くなった方がいるとのこと。）なお、冬季間の降雪は、多いときで3メートル程であるとのこと。

(2) 小山地区内の世帯状況：27世帯

小山地区内の3分の2は老人世帯であるが、独居老人はいない。また、子供がいる世帯は1世帯（2人）のみ。三世帯同居が多い。若い人は勤めに出で行くため日中は高齢者のみとなる。

(3) 地区外へ出るための交通手段：町営バス（1日3便、予約制のような状態）、自家用車

(4) 地区住民が主に利用している医療機関：

西川町立病院。小山地区から最寄りの開業医として大泉医院があるが、現在は診療を行っていない。

(5) 通院手段：自家用車

(6) 福祉施設：西川町立病院近くに単身者用のケアハイツがあるが、満員状態。同施設は、西川町が建て、社会福祉法人が運営している。

(7) 教育機関（通学方法）：入間小学校（生徒数14人）に町営バスで通学している。同小学校は18年度で閉校されるため来年度からは水沢小学校に通学することとなる（通学は引き続き町営バスにて）。

(8) 救急体制、夜間・時間外の診療体制に関すること：

冬季間でも除雪は、しっかりなされるため救急車も到達可能。子どものいる世帯は、夜間子どもが具合が悪くなったときを想定して常備薬を準備している。

2 医師のニーズ

小山診療所は、診療所としては規模が小さく、患者は以前は15人～20人程いたが、現在は多くても6人～7人で、場合によっては1人、2人のときもある。小山診療所には、足腰が丈夫な元気なお年寄りがある。小山診療所は、地区住民にとっては良いが、医師達にとっては時間的に厳しい（二時間程要する）。往診はするときもあればしないですぐに病院に戻るときもある。

※1 小山診療所には、西川町立病院の医師、看護師、事務職員、運転士各1名で向かった。

※2 12月22日（訪問日）の患者状況：診察患者2名、往診患者1名（ともに高齢者の方）。

3 住民のニーズ（診察に来た患者の家族等からの聞き取り）

小山診療所に医師が来てくれる事は嬉しい。小山地区に住む世帯は、まとまりがあるので日常生活で困ることは特になく（顔を見せない住民がいるときは、周囲の人が様子を見に行くなど協力している。ただし、屋根等の雪下ろしは各自行っているとのこと）。

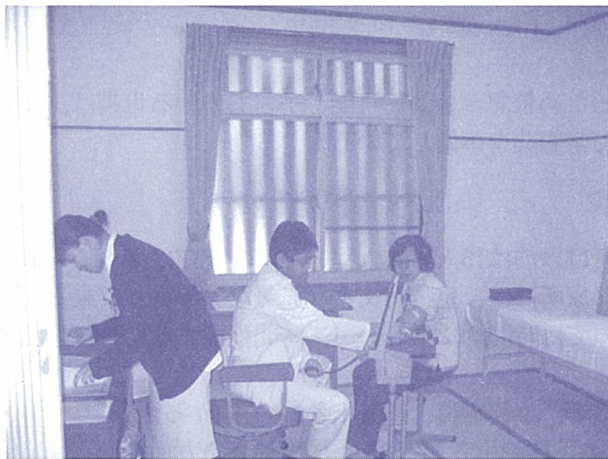
4 考察

地理的条件として、冬季間は、除雪が十分にされており、自動車の走行も可能との話だが、小山地区までの道のりは、道幅が狭いこと、カーブしている箇所が多いこと、道路の一方が崖となっていることから緊急時の西川町立病院への搬送等には困難を伴う地域であると思われる。

小山地区内には開業医がないことを考えると、西川町立病院からの出張診療所は必要と考えるが、小山診療所にて診察を受ける患者数を鑑みると医療スタッフの人的・時間的労力が十分に活用されているとは言えない。

5 その他（西川町立病院古澤事務長からの聞き取り）

- ・ 岩根沢、小山、大井沢の3診療所合わせて国から700万円程補助金を受けている。
- ・ 小山診療所について、廃止の動きが出ている。
- ・ 岩根沢診療所は、以前は毎週診療していたが、現在は住民とも話し合って隔週で行っている。岩根沢診療所についても、将来的にはやめるしかないだろうと思う。
- ・ 西川町の高齢化率は、県内一で約34%。
- ・ 小山地区に住む若い人は、雪のない所に行く。
- ・ 医療について、町民の立場から言えば、診療科をもっと増やしほしいと考えていると思う。
- ・ 西川町立病院等の小規模な病院は宿直医の問題（医師が少ないため、医師が休めない）等がデメリットとなっている。今は、山大の第1、第2内科から金・土（午前除く）・日に宿直医が来てもらっている。宿直は、月6、7回で80時間程。



【朝日町立北部診療所】

日 時：平成 18 年 12 月 26 日（火） 14：00～16：30 （曇）

診療所：高橋 潤医師

対応者：山形大学 教授 清水 博 氏

山形大学大学院生 高橋 俊章 氏（県福祉相談センター 理学療法主査）

県健康福祉企画課 佐藤 泰幸

○ 訪問当日の受診者数：16 名（女性 12 名、男性 4 名）

1 地区状況等

- (1) 診療所の位置：朝日町の北部に位置する大谷地区の大谷第五区集会施設に併設。町立病院までは車で 10 分弱。行政的には 7 つの集落をカバーする。
- (2) 朝日町の人口：約 8,600 人
（北部地区の人口：約 1,000 人）
- (3) 診療体制等：診療日時 火、金 13:00～17:00
医師 1 人、看護師 1 人、事務 1 人、受付準備 1 人
- (4) 外来患者数：①内科（火曜日）：20～30 人
②外科（金曜日）：2～3 人
- (5) 地区外への交通手段：町内循環バスが 1 日 2 便
- (6) 通院手段：徒歩が多い。除雪に関して問題はない。
- (7) 周辺の医療機関：朝日町立病院、寒河江市立病院、県立河北病院
- (8) 福祉施設：特別養護老人ホーム、養護老人ホーム
- (10) 救急体制、夜間・時間外の診療体制に関すること：地区まで救急車はすぐに来る。何かあると町立病院へ行く。

2 医師のニーズ

患者（疾患）の状況：高齢者慢性疾患で安定していて、町立病院まで移動手段のない人が診察を受ける。

在宅の人で多くのサービスを受けてもらいたいが、1 割負担になるので、自宅でやるという人もいる。しかし改善が見られない。採血、注射もする。インフルエンザ予防接種もする。ここに来るには、町立病院へ電話予約を要する。

（貼り紙：内科の薬を予約される方は前日（月曜日）午前中をお願いします。）

地域医療：薬さえ飲んでいれば大丈夫という感覚があるが、医師としては検査をもとに医療を進めたい。

しかし、患者は高齢者が多く、移動手段がないなどの問題がある。病院に来てもらえれば、もっと出来ることがあると思う。

医療費の負担が増え、受診を控えている人がいる。また、ジェネリックにしてくれという人がいる。老人独居、老老世帯の人はなかなか自宅に帰れない。施設利用するにもなかなか空かない。

町立病院全体の医療：救急医療の問題。町立病院でワンクッションおいて基幹病院へ行く。直接基幹病院にいければ良いのだが。

常勤医師 4 名。そのうち 1 名は育児休業中。3 人でやっているなので負担は大きい。

コメディカルは一生懸命やっている。リハビリが充実している。

退院後の通所をやっている。

訪問診療は60人対象にやっている。月・水・金に2人の医師が交代でやっている。1日に3-4人まわる。

お産は山形や寒河江国井産科まで行く。

小児科については、予防接種、かぜ、急患についてはそこそこやっている。

左沢、山辺、河北まで行く人は多い。

朝日町には3人の開業医がいる。

光ファイバー、IT遠隔診療は10人やっている。総務省のモデル事業になっている。9箇所在宅、1箇所施設。

土日の当直は応援を頼んでいる。平日の当直は3人でやっている。入院は40強。

3 住民のニーズ

患者A (女性、68歳)

家族は、じいちゃん、ばあちゃん、本人、だんな、子供(38)一人。外に2人の子供がいる。

Q) どういうときに来るのか?

町立病院外来で診てもらってから来る。

糖尿病は町立病院に行く。

ここは頼りになる。

ここは年配の人が来る。(60歳以上の人ばかり)

子供はここでは見かけない。

介護するばあちゃんがいるがまだ丈夫。

高齢者の一人住まいの人が具合悪いときは、町立病院に行く。

近所の人がそういう人のところに顔を出す。

交通の便は、バス(町内巡回、2/日)とか乗り合いで行く。

高齢世帯の人が具合悪くなったら、親戚の人に教えるかも。

一人暮らしの人は介護保険を使っている。

民生委員さんも回っていて、誰が具合が悪いか分かる。

診療所は2/週。

内科-火曜日-20人くらい。

外科-金曜日-2、3人くらい。

ここまでは歩いてくる、近いから。

遠い人は車で来る。家人に送ってもらったりしている。

冬の雪はかなり降るが、診療所の周りは除雪してある。

一番困るのは病気をしたとき。しかし、そんなに病気をしないから分からない。

ばあちゃんが具合悪いときは、親戚に頼んで車で町立病院に行く。

地域での助け合いは良い。

今不安なことは特にない。

除雪があるから雪かきは楽になった。

患者B(女性)、C(女性)、D(女性)

Q) どういうときに来るのか?

B: 血圧、薬をもらいに来る。

C: 血圧

Q) どうやって、ここまで来るのか?

B: 歩いて。

C: 老人車、冬は杖をついて。

Q) 病気でお困りのときは、どこに行くか?

D: ここに来る。

C: 車に乗せてもらって、町立病院へ。

Q) ご家族は?

B: 孫もいる。

D: 上のばあちゃんと二人。今まで悪くなったことがない。病気のことで困ったことはない。薬は薬局で配達してくれる。整形のときは町立病院に行かなくてはならない。

C: 5人暮らし。留守番を主としている。歩くのが大変。ふらついたりする。

患者E(男性、74歳、家族5人、身障手帳2級)、F(男性、83歳、家族3人)、G(男性、90歳、家族5人)

Q) どういうときにここに来るか?

E: 町立病院に行くのが面倒だから。

Q) 歩いてくるのか?

E: 5~10分で歩いてくる。

E: 最初ここに来て、悪いと本院を紹介され、その後ここで薬をもらう。

急いで町立病院に行くときは若い人が車で連れて行く。あるいはハイヤーで(2000円)。

F: 息子が役場に勤めているから乗っていく。

G: ハイヤーで町立病院に行く。

町のバスはここまで来ない。

日中は若い人が勤めているからいない。

夜は若い人が車で連れて行く。

E、F: 介護保険は使っていない。保健師はあんまり来ない。民生委員もあんまり来ない。

F: ここから一軒隣の家にいる。

1/2週ここに来る。高血圧と胃と腰。

目は寒河江の鈴木眼科に行く。

今年は3回町立病院に定期的な検査。2回は急に具合が悪くて。

耳が悪いときは町立病院に行く。

急に悪くなった時は救急車がすぐ来る。ここは近いから助かる。

患者H(女性)

1/月来る。血圧と心臓が悪い。診察と薬をもらいに来た。

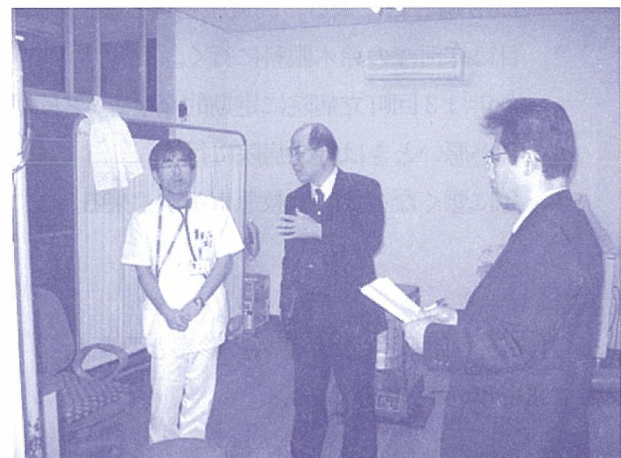
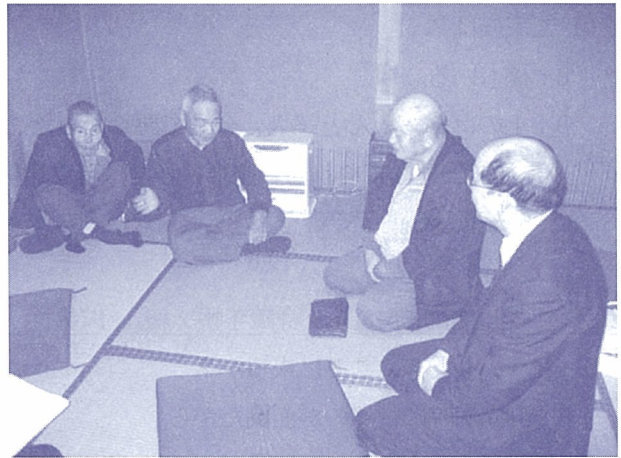
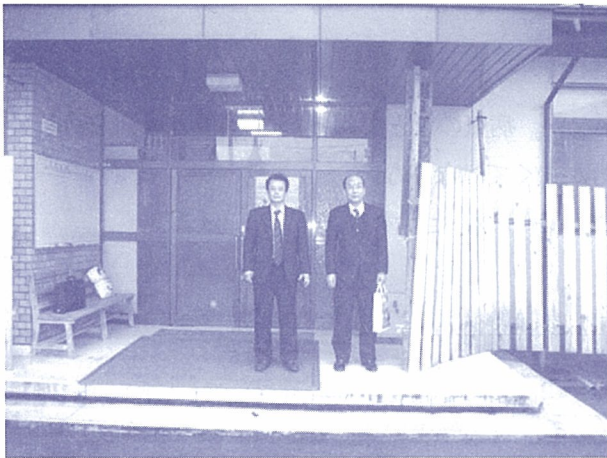
ここまで歩いて10分くらい。

患者I(女性、73歳、付添い人)

隣のばあちゃん(88歳)を連れて来た。今のところ病気で困っていることはない。
日中いる老人は80代の人が多い。

4 考察

患者は高齢者がほとんどで、かつ慢性疾患で症状が安定している人が多い。急性期には町立病院や市立、県立病院で対応がなされている。冬季の除雪もなされ、自家用車の乗り合い等で町立病院へ行く場合もあり、交通状況は比較的良好である。但し、診療所に医師を派遣する町立病院においては、育休中の医師がいることもあり医師の負担が大きくなっている。このような場合の医師の配置も含めた診療体制を、今後、どうしていくのが課題である。



【岩根沢診療所】

日 時：平成 19 年 1 月 24 日（水） 15：00～16：50（曇）

診療所：西川町立病院 佐藤医師

対応者：山形大学 清水教授 健康福祉企画課 國井主事

1 地区状況等

(1) 診療所の位置：西川町立病院から車で約 10 分山道を登ったところ。

(2) 岩根沢地区の人口：西川町の人口は平成 18 年現在 7,023 人、高齢者比率は 34.0%。

岩根沢はうち約 300 名の部落。農家は少なく、会社勤めが多い。

(3) 岩根沢地区の高齢化率：お年寄が多い。お年寄りの一人暮らし、二人暮らしもいる。

(4) 診療体制： 2 週間に 1 回。以前は週 1 だったが、患者の人数がまちまちだったので、2 週間に 1 回でまとめて診療することにした。

派遣スタッフ：医師 1 名、看護師 2 名、薬剤師 1 名、事務員 1 名、運転手 1 名。またボランティアの人なども来てくれる。

診療は主に血圧を見ることが多い。患者は大体 20 名ほど（その日は 24 名）。70 代が多いが、80 代の人もある。

(5) 通院手段：診療所までは徒歩で来る人が主。ただ、気づいたら近所の人で乗せあったりもしているようだ。西川町立病院までは町営バスも出ている。また町立病院へ行く際はハイヤーも使う（費用は個人負担）。

(6) 近隣の医療施設：西川町立病院。

(7) 地区外へ出るための交通手段：町営バス、自家用車（ほとんどの世帯にある。）

(8) 教育機関：小学校 9 人。中学校は今年統合され閉校となる。通学はバスで通っている。

(9) 救急体制： 冬も道は除雪がしっかりしてあって、深夜であっても特に移動に困ることはない。救急車も 10 分かからないで来てくれる。

一人暮らし、高齢のお年寄りの家には市がブザーを設置しており、何かあった時に押すと近所 3 件くらいにブザーが鳴るようになっている。

保健所の人も各家を回ってくれる。しかし、一番頼りになるのはやはり隣人。隣人同士顔と名前がわかっているし、お互い助け合っている。

2 医師のニーズ

- 西川町立病院の医師は 4 名（全員自治医大出身）。病床は 51 床で患者は 35 人くらい。
- 問題は当直回数が多いこと。深夜帯に患者が来ると、そのまま次の日の診療に入る場合もある。
- 診療所に行っている時の応援、マンパワーが足りない。
- 出張診療所は不定期
- 訪問看護・診療は先生によって違うが、私は（佐藤先生）週 1 回、5、6 人を診る。